

■ ご挨拶

風力発電設備との係わり

日本風力発電協会 理事 **鈴木 和夫**
株式会社 日立パワーソリューションズ



1. はじめに

系統部会 統括理事の鈴木和夫です。

昨年度は、協会関係者のご努力により念願の固定買取制度が施行され、安定事業の見通しが立ちつつも、同時に環境アセスメント法改正適用も実施され、系統連系制約課題も含め、まだ解決しなければならない導入環境整備条件が顕在化してきています。

現時点での環境省導入目標（2020年1,100万kW）も、世界の導入量推移から見ればかなり低い目標値でもあるにも係わらず、その達成可能性が厳しい状況にあり、アベノミクス経済政策に呼応した規制緩和、技術開発の方向性をさらに具体化する必要があると考えます。

系統部会も、継続的に技術的対応策等について議論を深め、連系可能量拡大の提言に繋がりたいと考えておりますので、委員、会員の皆様のご指導を宜しくお願い申し上げます。

2. 自分の業務

私は、(株)日立パワーソリューションズ（旧(株)日立エンジニアリング・アンド・サービス）所属で、ドイツ ENERCON 社の代理店及び保守サービスを行っています。

私の業務は、国内のお客様に ENERCON 社機の PR も含め、導入環境変化、地域特性にあったシステムで、且つ、事業者の皆様にも最適な事業形態をご提案し、採用頂く事です。

現在、風力発電設備、出力変動緩和システム、バイオマス発電設備等との複合システム提案も含め、さらに地域特性に合致したシステム提案を目指して参ります。

3. 小型風力発電の苦い歴史からのスタート

日立グループでは、オイルショック後の1970年代後半に、小型風力発電設備の開発に係わった時期があり、1979年に、北海道M町に出力10kW（当時の日本最大容量機）の風力発電機を納入しましたが、当時は技術的に未熟な部分も多く、ブレード破損等の事故もあり、最終的に安全上の問題で、ブレード回転をロックしました。

また、1982年には、K社の送電線保安小屋に建設する小型風車の引き合いを頂き、最大風速70m/sにも耐えられる風車を納入しましたが、峠下からの70m/sを超える吹上風によりブレードが飛ばされるなど、風力発電機の難しさを改めて勉強させられた貴重な経験の歴史がありました。

このため、我々が風力発電ビジネスを新たに開始するに当たっては、慎重論も多く、信頼性の高い風力発電設備の納入が、日立グループとして、このビジネス再開の前提でもありました。



北海道M町10kW風力発電機（1997年撮影）

4. 事業用風力発電設備との係り

1990年代の地球温暖化問題のクローズアップと新エネルギー導入促進機運の高まりに呼応して、1995年に改めて風力発電設備の実態調査した結果、欧州での風力発電設備の進展を踏まえ、信頼できるメーカーとタイアップして風力発電設備を輸入し、弊社のエンジニアリングと保守サービスの経験を加味して風力発電ビジネスに参入することにしました。

私は、18年前の海外調査から風力事業に係り、ドイツ風力研究所（DEWI）や型式認定試験をしているWind-Test等に行き、大型風力発電設備の稼働状況を調査し、可変速発電設備の性能が高いことを学ばせていただきました。

現在は、ENERCON社風車を国内に約220基を納入、保守対応をしております（E社納入実績は、約22,000基）、既設設備の高稼働率維持と、次期案件創生の毎日を送っています。